

## 神が心配してくださる

## ペテロ第一 5:7

コロナ禍が長く続いています。もう2年半以上経ちます。ワクチンはいつの間にか普通に3回、4回と打つ状態です。少し薬も出てきているようですがそれでもまだいつ収束するのか目途が立ちません。治療については医療関係者の方にお任せするしかありませんがこのように私たちの精神面において、特に感情面に様々な影響が及びます。その中で特に、もっとも対処すべき大きな感情は国立精神・医療研究センターによると不安の感情ということです。その不安な感情をどのように和らげることが出来るか、調整するかという研究がなされています。クリスチャンとして今日は聖書が不安について何を教えているかを学びたいと思います。実は聖書の中に日本語で「不安」という言葉は四回ほどしか出てきません。しかし、同じことを意味する言葉は「心配する」あるいは「思い煩う」という言葉になると思います。この、不安、心配、思い煩うという感情に対して聖書はどのように対処するように教えているのでしょうか？ またそのことに対するキリストの御心はどのようなものでしょうか？ そのことを今日は一緒に見て行きたいと思います。

## 1) 自分を責めない

まず、第一に、「心配する時」、「思い煩う時」自分を責めないことです。マタイ6章でイエスはこう言われました。「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。」マタイ6:25-26確かにイエスは、ここで、「心配するな」と教えておられます。しかし、これは、食べ物や着る物に事欠いていた貧しい人々に語られたもので、イエスは人々が、食べ物や着物のことで心配するのを責めておられるのではありません。むしろ「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。あなたがたの天の父がこれを養ってくださる。だからあなたがたにも必要なものを与えてくださる」と言って、人々を励ましておられるのです。

ルカの福音書では、この「空の鳥、野の花」のお話しは、「愚かな金持ち」の譬えの後で語られています。その「愚かな金持ち」はこう言いました。豊作の時、「こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。」ルカ12:18-19この金持ちはある意味「思い煩い」や「心配」から無縁の人でした。では、イエスはこの人を高く評価したのでしょうか。いいえ、この人は神の裁きを受けることになったと言っています。神を信じないで、自分の財産に頼って安心しきっていたことが責められているのです。神は人が自分なりに安心だと思っていることが実はどんなに不安定なものであるのか分かっていない者の愚かさを言われているのです。そしてそんなふうにならぬように、身のまわりで起こるさまざまなことを心配してはいても、その心配を取り除いていただくために神に頼ることのほうがよほど良いのだとイエスは言っておられるのです。時々、「どうしたら不安な気持ちを持たないですむでしょうか？」という相談を受けることがあります。冗談半分に「それは人間を辞めるしかないですね」と答えたりします。不安な感情は悪いものではありません。その感情が起こるから私たちは危険を未然に防ぐことが出来るのです。前から車が自分に向かって走って来ている時に不安な感情が起きるからこそ移動しようとするわけです。言わば不安な感情は警告ランプのようなものです。

神は私たちが思い煩い、心配するのを決してお叱りになりません。小心者、臆病者だなどは思っておられません。ですから、思い煩うとき、心配するときは、そのままの気持ちを神に申し上げるといいのです。詩篇94:19に、「私のうちで思い煩いが増すときにあなたの慰めで私のたましいを喜ばせてくださ

い。」、また、詩篇 139:23 には「神よ。私を探り私の心を知ってください。私を調べ私の思い煩いを知ってください。」との祈りがあります。そのように自分の「思い煩い」や「心配ごと」を正直に神に話すなら、神は「思い煩い」に代えて、平安を与えてくださいます。ピリピ 4:6-7 にこうあります。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」この御言葉の通り、自分の心配ごとや願いを正直に神に祈るとき、今まであんなに心配でならなかったことが、もう心の重荷ではなくなって、自分で思いもしなかったような平安で心が満たされる、多くの人がそのような体験をしています。思い煩いが心に満ちるとき、自分でそれをなんとかしようとするのではなく、思い煩いをそのまま神に告げましょう。聖書の約束の通り、神の平安があなたの心を守ってくれます。

## 2) 他者を思いやる

もし、心配するとしたら、良い意味での「心配」に心を向けるといいでしょう。他の人のことを心配することです。パウロは、ピリピの教会に「何も思い煩わないで、…」と書き送りましたが、そのすぐあとで、「私を案じてくれるあなたがたの心が、今ついによみがえってきたことを、私は主にあって大いに喜んでいきます。」ピリピ 4:10 と書いています。「心配」という言葉は「心を配る」と書きます。人が互いに相手のことを心配すること、案じること、それは必要なことであり、また、美しいことです。ただし、不安な感情が起こる原因の一つに状況をコントロールが出来なくなる時に起こりやすいということがあります。つまり、自分の思ったように相手が変わらないので心配ということですがこれは相手に心を配っているのではなく、相手に対する不信感から起こっていることです。「私を心配させて・・・」と言いますよね。これは相手を思いやっているのではなく、相手に気を使わせ、心配させているのです。

パウロは、自分が教え、導いてきた人たちのために、いつも祈り、また心を配っていました。パウロはコリント教会に宛てた手紙の中で、彼の使徒としての苦勞を数えあげていますが、その中で「ほかにもいろいろありますが、さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまずいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか。」コリント第二 11:28-29 と言っています。ピリピの教会に対しても、「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。」ピリピ 2:20 と行って、テモテを褒めています。何があっても大丈夫、心配なんかしてもらわなくても構わないという強い人よりも、テモテのように、少し弱いところがあっても、他の人を思いやることのできる心を持った人のほうが、主の働きにふさわしいとパウロは考えていました。私たちもパウロやテモテのようでありたいと思います。

## 3) 神の思いやりに委ねる

しかし、たとえ他の人のことであっても、あまりに心配しすぎて、神が見えなくなったり、御言葉を聞くことができなくなってしまったら、それは正しいことではありません。

ベタニアのマルタは、イエスと弟子たちをもてなすために忙しくし、妹のマリアに手伝わせようとしたのですが、なんということか、マリアは男の弟子たちに混じってイエスのひざもとに座り、教えを聞いていたのです。そのときマルタは、マリアにではなく、イエスに不満をぶつけました。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」ルカ 10:40 すると、イエスはこう言われました。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」ルカ 10:41-42

イエスは、もちろん、マルタひとりにそれをさせようとしたわけでもありませんでした。しかし、マリ

アにはしばらくの間、イエスの教えを聞く必要があったのです。ほんとうはマルタにもそれが必要でした。イエスは、マルタやマリアのもてなしを受ける前に、自分たちを迎えてくれた二人に「御言葉のもてなし」をなさりたかったと思われます。しかし、このときのマルタは、イエスの言葉のように、「心配し」、「気を使い」、御言葉に耳を傾ける余裕を失くしていたのです。

ここで「思い煩う」（三版では心配する）という言葉のもとの意味は、「心が分かれる」ことです。「心を乱す」（三版では気を使う）という言葉は文字通り「混乱する」という意味があります。つまりイエスはマルタに「あなたはいろんなことに心が分かれてしまって、混乱している」と言われたのです。「心配」が昂じると「不安」になります。「不安」が深まると「恐れ」になります。そして、「恐れ」から「パニック」が生じます。一般的にも「不安」の感情は放っておくとどんどんと大きくなるという特徴があります。「イエスをもてなす」という、良い動機で働きはじめたのに、「あれもしなければ、これもしなければ」という思いに押しつぶされ、一時的ですが、マルタは、パニックに陥ってしまったのです。目の前にイエスを見ながらイエスのお心から離れてしまったのです。けれども、イエスに優しく諭されたあとは、気持ちを取り戻し、マリアと一緒に、イエスと弟子たちの世話に励んだだろうと思います。マリアもマルタも、イエスの自分たちへの思いやりを知って、それに慰められ、励まされたに違いありません。

神は、私たちの心配が不安になり、思い煩いとなり、最後にはパニックになることを決して望んではおられません。聖書は私たちに「思い煩うな」、「心配するな」、「恐れるな」と教えていますが、そこには、すべて、「神があなたを支える」、「あなたを導く」、「あなたと共にいる」との約束が伴っています。きょうの箇所、ペテロ第一5:7にこうあります。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」私たちが思い煩わなくてよいのは、神が心配してくださるからです。ここで「心配する」と訳されている言葉には「心にかける」という意味があります。じつは、マルタが「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか」と言ったとき、この言葉を使っています。マルタは、イエスに「私のことを心にかけてくださっていないのですか」と言いましたが、イエスはマルタのことを心にかけておられなかったのでしょうか。もちろん、イエスはマルタのことも、マリアのことも等しく心にかけておられました。イエスは「マルタ、マルタ」と彼女の名を二度も呼びました。（ここは三版の方が区切りがあって良いと思いますが）それは、感情的になっていたマルタを落ち着かせるためだったでしょうが、同時に、イエスがどんなにマルタのことをどんなにか心にかけておられたかをも、言い表しているのです。女性だけではありません。男の弟子たちも、マルタが使ったのと同じ言葉、「何とも思われませんか」と言ったことがあります。舟がガリラヤ湖で嵐に遭って沈みそうになりました。弟子たちが慌てふためいているのに、イエスは眠っておられたのです。弟子たちは、「先生。私たちが死んでもかまわないのですか」マルコ4:38と叫びました。ここでは「何とも思われませんか」が「かまわないのですか」になっています。もちろん、イエスが「何とも思われぬ」、「心にかけておられぬ」、「心配しておられぬ」わけがありません。イエスは起き上がって、嵐を叱り、湖に「黙れ。静まれ」と命じ、嵐を鎮めました。イエスは絶えず弟子たちを心にかけておられ、湖の嵐を鎮めるとともに、弟子たちの心の嵐、恐れをも静め、心配や思い煩いを取り除いてくださったのです。

私たちの神は、私たち一人ひとりを心にかけて、心配してくださり、必要を備えてくださる神です。私たちの主は、恐れを平安に変えてくださるお方です。この神に、この主に、思い煩いを委ねましょう。聖書に「いっさい」とあるように、どんなことでも、すべてを申し上げて、委ねるのです。それは神が、私たちのことを心配してくださるからです。